

令和 7 年度 【 学園研究費助成金 < B > 】 研究成果報告書

学部名 情報社会学部

フリガナ ヨウ ネイ
氏 名 楊 寧

研究期間 令和 7 年度

研究課題名 活字印刷の技術アーカイブの構築—企業博物館の動体資料と職人の調査から

研究組織

	氏 名	学 部	職 位
研究代表者	楊寧	情報社会学部	講師
研究分担者	宮下十有	現代マネジメント学 部	准教授

1. 本研究開始の背景や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

近年、教育や技術継承の観点から、活版印刷の価値を再発見し、啓発する取り組みが進められている。しかし、既存の博物館展示やワークショップの多くは、小規模な印刷体験に限定されており、一冊の本ができるまでの体系的なプロセスや、さらに産業としての活版印刷の全貌を伝えるには至っていないのが現状である。

本研究の目的は、アジア活版資料館（亜細亜印刷株式会社）所蔵の実機および運用工程を対象に、職人による解説を付した動態展示の形式を用いて、印刷工程の記録・映像化することにある。こうした映像記録は、失われつつある技術の保存に留まらず、教育資源としての活用可能性を広げる実践的なアプローチとして、次世代への確かな技術継承を目指すものである。

2. 研究の推進方策 (300 字程度で記述)

本年度は、まず東京の「印刷博物館」および「市ヶ谷の杜 本と活字館」において実地調査を実施した。ワークショップへの参加を通じて、既存の展示内容や動態展示の手法を分析した結果、機器と映像をセットで展示する有効性を確認した一方で、現行の展示が抱える限界を明確化した。

次に、本研究のフィールドである「アジア活版資料館」が過去に制作した映像教材を分析し、新たな映像制作に向けた撮影方針を策定した。

これらの事前調査を踏まえ、2025 年 10 月 21 日から 22 日にかけて、同資料館にて実地撮影を行った。撮影では、活字製作から組版、印刷に至る一連の工程に加え、既存の資料では言及が少ない「紙型および鉛版」の製作目的と手法を重点的に記録した。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

本年度の研究成果は、既存の展示・教育手法における課題の特定、およびそれに基づいた撮影計画の策定と、実地での映像記録の遂行にある。

第一に、国内の主要な印刷文化施設（印刷博物館、市ヶ谷の杜 本と活字館）の調査を通じて、現行の啓発活動や動態展示の内容を確認した。そこで、実機と映像を併用した展示の有効性を再確認する一方で、多くのワークショップが「単発的な小型印刷物の制作」に留まっている現状を明らかにした。これにより、書籍一冊を完成させるための体系的なプロセスや、かつて日本の出版産業を支えた活版印刷の全貌を伝えるには至っていないという、既存展示の限界を特定した。

第二に、アジア活版資料館が過去に制作した映像教材を詳細に分析し、新たな撮影方針を策定した。既存教材の構成上の課題を踏まえ、現代のデザイン教育現場で求められる視覚情報や、工程間の連関をより効果的に伝えるための記録構成を再設計した。

第三に、2025年10月21日から22日にかけて、アジア活版資料館にて実地撮影を行なった。策定した撮影計画に基づき、活字製作から組版、印刷に至る一連の工程を網羅的に記録した。特に、書籍の量産体制を支える重要な技術でありながら、既存の資料では言及されることが極めて少ない「紙型および鉛版」の製作工程に焦点を当て、その目的と手法を詳細に収録した。本年度の活動により、単発的な体験では捉えきれない書籍制作の連続的なプロセスを、高精細な映像素材として収集することに成功した。これらの成果は、単なる技術記録に留まらず、活版印刷が担ってきた産業的役割を次世代に伝えるための教材開発に向けた、極めて重要な基盤となるものである。

4. キーワード (本研究のキーワードを1項目以上8項目以内で記載)

①活版印刷	②映像記録	③動態展示	④教材開発
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

【論文】

楊寧，宮下十有「活版印刷工程の映像記録と教材化に向けて—アジア活版資料館における既存教材の分析と撮影計画—」，『情報社会学部紀要』，第2巻，pp.77-84，2026年3月掲載予定